

恨みの嗚咽から祝福の舞へ

— タイの精霊信仰にみられる加害者としての 死と罪業断ちの儀礼 —

矢野秀武

1. はじめに

本稿では、東南アジアのタイにおいて、ある特殊な宗教儀礼を行っている団体をとりあげる。この団体は、精霊信仰を中心に据えつつも仏教団体であると主張し、クライアント自身がトランス状態に入る儀礼によって苦難を除去するといった宗教的サービスを提供している。とりわけ人工妊娠中絶による罪業を取り除くことができるといった宣伝を盛んに行っている。一般に精霊信仰は、タイの人々の間で根強く営まれてはいるものの、主流の上座仏教からは、迷信として批判の対象にあげられる。本稿は、このような精霊信仰と主流の上座仏教との間にある溝に着目し、そこからタイ社会の死生観の一端を明らかにしていくことを目的とする。

死というものは、多様な形において体験されるものであり、死一般をいきなり議論することは難しい。そこで本稿では試みとして、死にまつわる特殊な宗教的行為、ここでは中絶をめぐる罪業断ちの儀礼というものに着目し、主流の上座仏教や精霊信仰における死生観の揺らぎを浮かび上がらせ、そこからタイ社会の死生観の一端を明らかにして行きたい。とりわけ、通常死ならびに一般的な死生観とは異なった、異常死、中でも加害者としての死、つまり誰かを死に至らしめた者の立場から見た死という、特殊な死の経験にまつわる死生観を明らかにしていきたい。

この点を論じるために、以下、まずタイ上座仏教と精霊信仰の複合体に関する基本情報ならびにそこに見られる死生観を解説し、次に、本稿が主たる事例として取り上げる団体の活動内容や教理を紹介する。そしてそれを踏まえた上で、特殊な死の経験に関する死生観を浮き彫りにしたい。

2. タイ上座仏教と精霊信仰

タイでは人口の圧倒的な数（約95%）が仏教徒であり、それ以外はイスラーム教徒（約4%）とキリスト教徒（約0.6%）が占めている[Kromkansasana Krasuwangsu'ksathikan 1995: 19]。少数ながら中国系とベトナム系の大乗仏教徒もいるが、宗教帰属について統計上大半は上座仏教徒であると言えよう。また、単に多大な信徒数を抱えているというだけではなく、タイの上座仏教は、公認宗教制度において認定された公的な組織の1つでもある。しかもその中で最大の勢力を持っている。もっとも、国教とは規定されていないが、仏教は国民統合のイデオロギーとして機能し、道徳的な判断を行なう際の重要な知識の源ともなっている。

タイ上座仏教の教理および実践内容について、ごく簡単にまとめると、「解脱志向」「タンブン志向」「呪術志向」といった3つの傾向からなると言われている[小野澤 1991: 105-114]。まず第1の解脱志向は、出家して227項目の戒律を持し、パリ語経典と注釈書を聖典として学習し、煩惱にとらわれた輪廻の状態から解脱して涅槃に達することを目指すものである。これは主に僧侶や沙弥（見習僧）あるいは非公認の女性出家者であるメーチー（Maechil）²⁾が行なう実践形態であり、瞑想ないしは経典学習を通じ、四諦八正道、戒定慧の三学の実践を身につける修行である。しかし、出家者全てがそのような意識を強く持っているとは限らず、次に示すような在家者と同様のタンブン志向の仏教観を持っている者も多い。また、逆に在家者でありつつ涅槃を目指して修行している人々もいるが、かならずしも一般的な形態ではない³⁾。

第2のタンブン志向の教理と実践においては、解脱そのものよりも、善因善果・悪因悪果といった因果応報の業の論理が前面に現れ、倫理的宗教的な実践が重視される。つまり、自己の為した行為における善し悪しの結果が現在・将来に影響を及ぼすという考えに基づき、現世において善い行いを心がけるといふものである。このような善果をもたらす善い行為を、功德（ブン bun）を為す（タム tham）という意味でタンブン（積德行 thambun）と呼んでいる。タンブンは主に仏教を護持する諸行為として捉えられており、在家者にとっては僧侶や寺院に対して布施や食事などの経済的支援や労働力に

よる支援を行なったり、仏祭日に自ら五戒⁴⁾を持すことがそれに当たる。しかし、出家自体が功德になると考えられているため、タンブン志向に重きを置く出家者も多い。また、タンブン志向の考えでは、行為の結果が作用する時空は、現世内の過去や将来だけに限られず、過去世や来世にまでも及んでいる。したがって、信仰の基本的な様式としては天界や地獄界などの存在も信じられている。ただし、一部の仏教徒の中には、天界・地獄界などというものは、心のあり方を比喩的に述べたものであり、実在するものではないという立場に依拠する者もいる。

第3に呪術志向とは、僧侶の関わる儀礼に参加し、聖句を耳にし、聖化された物品などを入手する事により、現世において直接的に効果をもたらすような守護力を得ることを中心とした考えと実践である。例えば、儀礼の際に人々に散布されたりする聖水 (nammon) や、対象物の周辺に張り巡らして聖化を行なうための聖糸 (サーイ・シン saisin) などがその代表格である。また護符として身につける小型の仏像 (プラ・クルアン phra khru'ang) なども僧侶によって作成されて在家信徒に配布され、守護力を秘めていると多くの人々に信じられている。これらの儀礼や護符作成に際して僧侶は、パリット (parit) と呼ばれる聖句を読み上げる。この聖句は三蔵経の特定の箇所をパーリ語で読み上げることにより、災難を防ぎ吉祥を招く護咒であり、セイロンにおいて生まれたものと言われている。パリットは上記の場合以外には国王の即位式、新築祝いや仏像の開眼など吉祥を祝う場や葬式や死者供養などにおいても誦唱される[奈良 1973、佐々木 1986:187-220]。

また上座仏教とは区分されるものの、タイの社会においては精霊信仰なども広く実践されている。精霊・死霊 (ピー phi) や神々 (テワダ thewada) といった超自然的存在や、クワン (khuwan) と呼ばれる生霊に関する諸儀礼は⁵⁾、様々な形でタイ人の生活の一部となっており[アヌマーン ラーチャトン 1979:247-300、小野澤 1983]、とりわけ村落部では地域社会の長老の権威と深い関わりを有していることがある[林 2000]。これら精霊信仰と上座仏教の信仰は、個々の実践者においては相互補完的な関係を保っていることが多いが[Tambiah 1970]、神々や精霊や生霊の関わる信仰実践は単なる迷信であるとか、宗教ではなく呪術であるなどと言われる事も多く、一段低いところに位置づけられている。とはいえ、これら精霊信仰によって

もたらされる守護力を求める信仰は根強い。なお、本稿で後に見るように、信仰の実践当事者がこれらの精霊信仰に対し、仏教とそれ以外の信仰といった形で明確に線引きしているとは限らない場合もあり、またその線引きされる箇所が万人共通であるとも限らない。

次に、タイ社会における宗教的な死生観、とりわけ上座仏教と精霊信仰の複合信仰の中での死後世界に関わる諸観念について簡単に述べ、本稿の主たる対象となる特殊な精霊信仰と比較するための準備を整えておく。まず、主流の上座仏教における死後世界の考え方、特に近代合理主義的な解釈には依存しない一般の出家者や在家者による考え方においては、人は死後に靈魂（ウィンヤーン winyan）となって肉体を離れ、功德と悪徳（パーブ bap 宗教的な意味における悪い行い）の量によって、天界や地獄界あるいは人間界等のどこかに生まれ変わってくるとされている⁶⁾。ただし、功德の量は亡くなった本人の行為によってのみ決まるというわけでもない。教理解釈上は異論があるのかもしれないが、タイ上座仏教徒の多くは、生者が死者に対して功德を送り与えることができると信じている。仏教信仰に基づく葬儀においては、死者の魂を再生させるために功德を送り与えることが主眼となる。

他方の精霊信仰においては、人間界に影響を与える精霊・死霊（ピー）という存在への畏怖心に基づく死後世界の観念が見られる。その畏怖心は、人間界とは異なる異界に住む者が有する無秩序な力、人間による制御が困難な力への畏れに基づくものである。しかし、人間と精霊・死霊はまったくつながりのない異なる領域の存在というわけでもない。人間の新生児は精霊の子供とされ、いつ異界に戻るかもしれない不安定な存在とされている[小野澤 1991: 131]。また人は死後に精霊・死霊となり、人間社会に災厄をもたらす存在になるので、葬儀においては死霊がもたらす災厄を、死霊ともども地域社会や人間界から追放することが重要となってくる。異界に送り戻された死霊は、異界の住人あるいは漠然と祖先の精霊の仲間入りをし、いつの日にか再び、人間界に生まれてくるかもしれない。しかしそのような再生を儀礼において積極的に促すというわけではない。また、3世代以上を遡るような家系の観念に基づく先祖という考えはほとんど見られず、親族の墓というものも華人系タイ人を除いては見られない。

このように、上座仏教と精霊信仰の死後世界に関する観念は、かならずし

も一致していないのだが、多くのタイ人にとっては、その2つの死生観が同居する形で死者儀礼が行われる[川野 1997]。例えば、一人の人間の死に対して、一方で輪廻転生を促すための追善供養が行われつつ、後には集合的死者の仲間入りを示す儀礼が行われ、そのような個別性を失った集合的死者への供養が行われるようになっていくというケースもある[村上 1994]。

また、通常死か異常死かといった点も、死者儀礼や死者の存在様態に関する観念に影響を与える。通常死の場合（かつ死者儀礼が滞りなく行なえた場合）は、その魂は災厄をもたらす死霊として見なされることはない。この場合、死後すぐの葬儀を含む一連の死者儀礼は、地方によってやり方は異なるものの、火葬から遺骨の埋葬、そしてその後の追善供養へと進められていく。他方、異常死の場合（例えば、産褥死、自殺、事故死、悪性の病気による死、殺害による死、幼児の死など）は、特殊な死者儀礼を施すこととなる。たとえば東北タイのある村では、まず土葬を行い、数年後に掘り起こして火葬を行ない、普段は使用しない共同墓地に埋葬したりする。異常死は転生をめぐる生命の循環を著しく乱すものとされており[林1985: 359]、その乱れとは、この世に強い執着を持った死霊としてこの世界にとどまり、人々に危害を加えるというものである。その執着を取り除くために特殊な死者儀礼が行なわれるというわけである。

以上がタイ上座仏教ならびにそれに関連する精霊信仰の概括的な内容、および死後世界に関する諸観念である。以下で、本稿がとりあげる宗教団体は、精霊信仰を中心に据えつつも、自ら在家の仏教だと主張し、主流の上座仏教に接合しようと試みている。しかし、この団体の諸実践の背後にある死生観は、従来の精霊信仰のみならず民衆仏教的な追善供養にとまなう死生観からも、微妙な形でずれている部分がある。この相違の源は、この宗教団体で実践されている儀礼とその教説の特殊性によるものと言えよう。その儀礼と教説とは、意図の有無を問わず他人の命を奪ってしまうという事から生じる罪業（とりわけ人工妊娠中絶をそのような行為であると強調している）に対し、トランスを伴う儀礼と仏像の購入と奉納等を行えば、命を奪われた死霊から許しを得ることができ、罪業から開放されるというものである。この思想には、一方で異常死によっていわば怨霊となった死霊を人間世界から追放するという形式をとるが、そこには通常精霊信仰には見られない許しといった

情緒的な観念が入り込んでいる。またこのような教理は、儀礼を行なったりでは、過去に為した行為による罪業が無くなることはないという上座仏教の教理学的な立場と鋭く対立し、著名な新聞紙上でもこの団体の考えに注意を促す記事が掲載された[Matichon. 2002: 1-2]。しかしそこには、単に過去の行い(業)の発生・変容・移動・消滅といったいささかドライな力学風の見解にまつわる解釈の相違というよりも、意図の有無を問わず他人の命を奪ってしまうという、加害者としての死の経験にどのように対応するのかといった態度に関わる相違が、根底に横たわっているように思える。これらの点を明らかにするため、以下この団体活動や思想をとりあげる。ただし、ある理由があって、この団体において筆者が行なったインタビューや観察の記録は使用することができないので⁷⁾、この団体が発行している書籍・雑誌やビデオのみを資料として論を進めていくことにする。

3. タムバンダーン

首都バンコク郊外の閑静な住宅地に、普通の住宅3~4軒分はあると思われる1階建ての広い建物がある。黒色のスモークを貼ったガラス窓に囲まれたこの建物の扉を開けると、中からは金属音のような鋭い音が漏れてくる。100人ほどの人々が、皆で「ナ・ナ・ナ・ナ…」と連続的に唱えている声である。参集者達は、目を閉じ胡坐で床に座っている。しかし静かに座しているのではなく、胃の中のを吐き出すようなしぐさをしたり、あるいは鳥のように手を羽ばたかせたり、中には立ち上がって舞い踊ったりと、それぞれが思い思いの形で激しく体を動かしている。

この道場の奥に目を向けると、仏壇があり、正面には金色に輝く大きな仏像が置かれている。その周囲にも小さな仏像や仙人の像がいくつも並べられている。その手前には、赤色の1人がけソファーが設置されており、そのソファーに深々と胡坐をかいて座している男性がいる。この男性は、タイ社会でお寺に参拝する際に着用するような上下純白の服を身に着け、手にマイクをもち、目を開けて呪文を唱えている。この特殊な儀礼空間の中で、静かに座し目を開けているのは彼だけである。それ以外の人々は、病気や会社の倒産や家庭内の不和など、現在抱えている様々な苦難から解放され、聖なる力に守られ安心できる生活を得ることを願い、このようなトランスを帯びた儀

礼を行っている[Munlanithi Thambandan no data]。

この団体の名前は、タムバンダーン財団 (Munlanithi Thambandan) という。「タム」とは仏法、真実、正義など多様な意味の含まれる用語である。「バンダーン」は超自然的な力によって物事を生じさせる事を意味する動詞である。このように仏法と靈験の総合を匂わせるタムバンダーンという名称は、具体的には意味がつかみづらいものであるが、この点、後に述べるように財団側の説明も曖昧としたものである。

代表者とクライアント

この団体代表者は、以前ワンロップ・ブンチャイヤデーット (Wanlop Bunchaiyadet) という名前であったが、1994年頃よりワンロップ・タムバンダーン(Wanlop Thambandan)と名乗り始めている[Mitikam 1994]。財団が発行している書籍に基づけば、ワンロップ氏 (以下、敬称は略す) の経歴は以下のようなものである。彼は1943年に中部タイのラーブリー県に生まれ、幼くして父が戦場で行方不明になり、母親は病死している。後に近郊のノンタブリー県に移り、6歳から10歳頃までこの県の寺院で寺子となり、寺院や僧侶の手伝いをしながら、衣食住を与えられて小学校にも通っていた。この寺の住職は、占いや厄除けや除霊、薬草による病気治療などを行っており、ワンロップはその知識を学んだとされている。彼はその占いで父親が生存していると告げられ、14～15歳頃に意を決し父親を探しにバンコクまで出かける。その後、映画の弁士や占いを行なって地方巡業しながら生計を立てていた[Thaidam no data a: 84-96]。

彼が30歳の頃に、ようやく父親と再会でき、両親へ功德を送るために僧侶として出家することになる。(どこの寺で出家したかは書籍には記載されていないが) この出家体験で彼は、呪文や秘術 (wicha wethamonkhatha) を学んだとされている。しかしこのような呪文や秘術は、僧侶の身分で行なうと非難されることが多いので、還俗して、呪文や秘術の師匠を探し回るとされている。そこで出会ったのが、カンボジアと国境を接する町アランヤプラテートのある寺で修行していたリー・チャントコー師 (Phra Li Chanthako) という僧侶である。ワンロップはこの僧侶の下で、修行し、神々や聖なる師の霊を降ろすタムバンダーンの術を伝授されたとしている⁸⁾

[Thaidam no data a: 3, 21-24]。その後、東北タイのスリン県やマハーサラークム県や、中部タイのアユタヤー県を巡り、多くの僧侶や在家修行者から様々な術を習ったと述べられている[Thaidam no data a: 97-100]。これらの様々な術を学んで後、ワンロップは、1985年頃よりバンコク郊外でタムバンダンの術を行なう道場を開き、現在に至っている。

また、この道場をこれまで訪れた数多くのクライアントは、組織化された集団にはなっていない。多くのクライアントは、ここにとどまることはない。長年この団体の儀礼に参加している者もいるが、明確な組織は形成されていない。しかし、タムバンダン財団の寄付によって建設中の寺院があり、そこにまとまって参拝に行くという行事は行なわれている。これはクライアント組織化への萌芽と言えるかもしれない [Mulanithi Thambandan no data]。

儀礼

ワンロップによるタムバンダンの術は以下のような手順で行なわれる。四角い銀色の盆が用意され、その上に、白布1枚 白い花10個、線香5本、太くて長い蠟燭2本、細くて短い蠟燭10本、紙幣120パーツを乗せ、クライアント各自のそばにおいておく。その後、ワンロップが現れて、三帰依を唱え、五戒を受け、神々（テワダー）へ呪文を唱える。この呪文と同時に、クライアントは先ほどの盆を頭上に掲げて、聖師（クルー・バー・アーチャー khurubaacan 人々を守護する神々のような存在。単に師と呼ばれている）や神々へ守護を祈り、仏壇前まで移動してその盆を置く。クライアントが元の座席に戻ってくると、ワンロップはクライアントに対して、胡坐で座って胸元で手を合掌し、目を閉じて「ナ・ナ・ナ…」と唱える（phawana）よう指示を出す[Thaidam no data a: 31-32]。

するとクライアントの中には、ナ・ナ・ナという発声ではなく、泣き叫ぶような嗚咽の声を上げたり、意味不明の言葉を口にしたり、もがき苦しむ動作や、羽ばたくような動作、招くような動作、舞う動作をする者が現れてくる[Mulanithi Thambandhan no data]。その間、ワンロップは、聖なる師や神々を呼び降ろすための呪文を唱え続ける。20分程度経つと、ワンロップが「身体を還せ」(khu'n sangkhan) と告げて、儀礼が終わる。その後、ワンロップが儀礼の際に生じた様々な動作の意味を解説し、休憩に入る

[Phatsattha 1995: 40]。このような儀礼を3~4回繰り返し、1つの儀礼過程が修了する。クライアントの中には、その後個別の相談を受けるために、小部屋に入り、占い師（ワンロップの妻）に自己の苦難の原因を突き止めてもらい、その解消法を伺う者もいる。通常そこでは、追善供養のための仏像を購入し寺に奉納し、水掛の儀礼で功德を霊に送り、さらにタンブンに勤しみ五戒を守って生活するといったことが、恨みの霊から許しをもらうために必要なのだと指導される[Phatsattha 1995: 41]。

教義1：2種類の憑霊

このような一連の儀礼の意味については、以下のような教義的説明がなされている。まず、トランスによって生じる様々な動作は、大きく2種類に分けられている。1つめは、苦しみの表情でうめいたり、泣き叫んだり、嗚咽するといった動作である。この動作はそのクライアントに恨みを抱いた死霊が取り付いていることを意味する。タムバンダーン財団では、この死霊のことを「罪業の主 (caokamnaiwen)」と呼んでいる。それは、主にそのクライアントに恨みを抱いてとり憑き、災厄をもたらし、クライアントを苦しめているとされる存在である[Phatsattha 1995: 40]。後に詳細に述べるが、この罪業の主は、意図の有無を問わず何らかの形でクライアントに殺害されることが多い。苦しみの表情や、泣き叫び、嗚咽は、この罪業の主の苦しみがクライアントの身体動作として現れているのだと解釈されている。この罪業の主の苦しみを和らげ、クライアントに災厄をもたらさないようにするには、先に述べたように、それなりの費用を支払って行なわれる占いや仏像の奉納といった一連の儀式を行なう必要がある。

もう1つの動作は、このような苦しみの動作ではなく、鳥のように羽ばたくしぐさや、片手を軽く挙げて招く型や、舞い踊る動作などである。これは、仏像を寺に奉納するなどの追善供養を行なうことで、クライアントが罪業から開放された事を示すものである。あるいは、初めてのトランス状態で、これらのしぐさを見せる人もいる。というのは、これらのしぐさ1つ1つに意味があり、それはそのクライアントを守護する聖師や神々の動作が身体上に現れたものと考えられているからである。

例えば、鳥のように羽ばたくしぐさは、黄金舌のサーリカー鳥（サーリカ

ー・リン・トーン Salikalinthong) と呼ばれる神で [Thaidam no data a: 31-32]、この護符を持っていると語りがうまくなり、人から好かれるとされている[Tambiah 1984: 226]。また、片手を挙げて招くしぐさは、招き女神(プラ・メー・ナング・クワック Phra Mae Nang Kwak) と呼ばれる神である。この招き女神は、ちょうど日本の招き猫と同じように、幸福を招き入れると信じられており、店先などに置かれていることが多い。その他にも、観音や稲の守護女神、守護力が強いと信じられている有名な高僧などが、クライアントに降りてくる。彼らはこれらの守護神を自己の聖師と仰ぎ、敬意を表す。また、舞い踊るしぐさは、これらの聖師が祝福を与えているのだとされている[Thaidam no data a: 33]。

これら聖師がクライアントに降りてくるということは、それ自体が功德を増すことにもなるとされている。そのため、一方で、罪業の主から解放されたことと、他方で、聖師が功德を与えてくれたことの相乗効果によって、クライアントが抱える生活上の苦難が解消されるのだとされている。また、タムバンダーン財団では、これら聖師の守護力をより確かなものにするとしている、様々なお守りも販売している。

タムバンダーンの教義では、以上のような守護神的な聖師は84,000種⁹⁾存在するとされており、それらを総称しタムバンダーンと呼んでいる[Thaidam no data b: 18-19]。そしてワンロップに、この聖師の集合体であるタムバンダーンが、自身の中に入り込んでいるので、タムバンダーンの儀礼が行なえるのだと述べている[Thaidam no data a: 70]。先述の来歴のところでも述べたように、ワンロップは、中部タイ、東北タイのあちらこちらの道場をおとずれ、様々な術を学んだとされているが、それは、上述の黄金舌のサーリカー鳥に関する術や、招き女神の術などの事なのである¹⁰⁾。

教義2：加害者としての死と許し

タムバンダーンの教義において、もう1つ特徴的だと思われるのは、殺人の加害者としてのその死に対する経験(以下、加害者としての死、と表記する)と、その行為への許しを強調している点である。これはとりわけ、人工妊娠中絶の経験に関しての宗教的解釈として表明されることが多い。また、この団体を訪れるクライアントは、それぞれ様々な悩みを抱えているが、そ

れを引き起こす罪業の原因の多くは、中絶にあると述べている[Thaidam no data b: 35]。この点を強調するワンロッパは、『中絶が苦難の原因か?』[Wanlop 2001]という題名の書籍を出版している。また、タムバンダーンの書籍や、雑誌広告には、中絶が原因で災厄まみれの人生を送ることになり、タムバンダーンの儀礼によってそこから脱却できたといった、体験談が記されている。例えば、次のような女性の体験談が掲載されている。

この女性は、結婚の後に会社を退職して飲食店を経営し、さらには株で利益をあげて裕福な暮らしをしていた。しかししばらくすると、事業運営に失敗し多大な借金を抱えてしまう。土地家屋を売却したが、それでも借金は返済しきれなかった。それどころか、一攫千金を狙って借金を返済しようと賭博に手をだしさらに借金を増やしてしまう。自殺をも考えた彼女は、そのとき、以前雑誌で目にしたタムバンダーンの記事を思い出し、古い雑誌をめくってみる。するとそこに自分と同様に全財産を失ったという体験談を目にし、すかさずワンロッパの道場を訪れ、タムバンダーンの儀礼を受けることにした。

儀礼をはじめるとこの女性は、突然嗚咽がこみ上げ、涙を流し、泣き叫び始めた。儀礼の後に、ワンロッパは、そのようなしぐさは、罪業の主が取り憑いていることを示しているのだと説明し、さらには、「あなたは、以前、中絶したことがありますでしょうか?」と尋ねてきた。呆然としつつもこの女性は、2度の中絶経験があることを包み隠さず白状した。これに対し、ワンロッパは、「中絶して子供を体外に出しても、その靈魂 (citwinyan) は、あなたにへばりついており、いつでも恨みをはらそうと待ち構えている」のだと説明し、また、「中絶は殺人と同じく深い罪業になります。もしその子が男の子として生まれていたならば、将来、仏様の御教えを広め伝えて仏教を護持する僧侶となったかもしれません。そうならば、これは僧侶御一方を殺めるのと同じくらい罪深い行ないなのです。当然、今世でその報いははっきりと現れてきます。」とも述べている。

その後、災厄の原因を知ったこの女性は、罪業の主から許しを得てその罪業を絶つために、ワンロッパの指示にしがたって仏像を寺に奉納している。仏像奉納後の儀礼で彼女は、うめき苦しみのしぐさが現れなくなり、代わりに黄金舌のサーリカー鳥の動作が生じ、彼女は祝福と功德を得ることができ

た。すると、その後の生活では、借金が順調に返済できるようになっていった[Phatsattha 1995: 40]。

以上は、体験談の典型的な事例である。この事例ではクライアントは、中絶が罪深いものだという明確な自覚を持つことなく、また中絶したという記憶も薄らいだままで、ワンロッパの道場を訪れ、そこでワンロッパの質問に導かれながら中絶経験を意識化していつている。もっとも、この体験談は、タムバンダーン側が広報用にまとめたものであり、クライアント自身の語りとは異なるものとして扱わなくてはならない。したがって現代のタイ人が、中絶をどのように考えているのかについては、この体験談からは推測できないが¹¹⁾、少なくともタムバンダーン側は、クライアントに中絶経験などを思い起こさせて、加害者としての死を意識化させようとしていると言えよう¹²⁾。例えば、中絶によって生じた罪業の主による災厄は、中絶を行なった女性だけではなく、中絶を勧めた家族などまで及ぶものだと述べている[Wanlop 2000: 199]。さらに別の体験談では、儀礼後の質疑応答で、中絶などしたことがないと反論するクライアントに対してワンロッパは、事故などで誰かの命をうばっているはずと詰問する。するとこのクライアントは、確かに数年前にそういった事故を起こした事があると納得している[Wanlop 2001: 179]。タムバンダーンの教義の特色は、このいささか強引なやりかたでクライアントに加害者としての死を意識化させ、さらに怨霊との和解に導くというものである。

教義3：仏教の一派という解釈

精霊がとり憑き、僧侶が儀礼に介在していないといった、このタムバンダーンの活動は、外部の人々からはまったく仏教だとは思われないうだろう。しかし、ワンロッパは、リー師といった僧侶から伝授されたタムバンダーンの教えと活動は、仏教の一派なのだと主張している。そして、道場の正面仏壇には、大きな仏像が置かれており、仏の教えが中心にあることを強調している。また、仏教には、世間と出世間の教えがあり、僧侶は涅槃を目指す出世間の仏教を重視するが、タムバンダーンでは世間の仏法を重視し、涅槃ではなく罪業を絶って現世での苦難を取り除くことを重視しているのだと述べている[Thaidam no data a: 18]。その意味では、本稿で先に述べた、上座仏教

の「タンブン志向」と「呪術志向」が前面に出ている実践だと言えるが、ただし、僧侶はタムバンダーンの儀礼に（少なくとも現在は）関わっていないし、民間の術者からも儀礼を伝授されているという点では、民間の精霊信仰の様相を色濃く反映している¹³⁾。

この論理に関連して、「ナ」という唱え言葉の意味も説明されている。つまり「ナ」とは、三蔵經典によく出てくる唱え言葉の「ナモータッサー」や「ナモー」その他の聖句に必ず見られる大切な言葉であり¹⁴⁾、これをタムバンダーンでは、世俗世界と仏法世界の狭間で使用する言葉としているのだと述べている [Thaidam no data a: 18]。

そして、精霊の憑依を伴う特殊な儀礼とナという唱え言葉を使うタムバンダーンは、タイ上座仏教の多様な瞑想流派と同じく、1つの仏教の術智(wicha)なのであり、正しい仏教なのだと言っている[Thaidam no data a: 17-18]。しかしながら、他方では、僧侶がこの儀礼を行なうと非難されることになるという自覚も有している。

4. 考察

以上述べてきたタムバンダーンの儀礼と教理には、特殊な死生観が見受けられる。タイの上座仏教ならびに一般的な精霊信仰における死生観との比較を通して、その点を明らかにしていきたい。タムバンダーンでは、人工妊娠中絶などに代表される死を、クライアントに対して、加害者としての死として意識化させ、さらにトランスを伴う儀礼を通じて和解と許しを与え、罪業を絶つという点を強調している。この死生観（ここでは死霊の行為パターンに関する諸観念）は主流の上座仏教というよりは、むしろ既存の精霊信仰の死生観に近い。もちろんタンブンや五戒を強調し、追善供養を行なうという点では仏教的な要素も含まれているが、災厄をもたらす死霊、とりわけ異常死した死霊を、人間界から排除する傾向に注目した場合、精霊信仰の死生観が基底にあると言えるだろう。またタムバンダーンにおいて追善供養を受けた罪業の主は、どこかに消えていくだけである。怨霊が無事に再生へ向かったなどといった輪廻転生の説明はなされず、ただ単に聖師が祝福をもたらしに降りてくるだけである。

しかし、怨霊とも言える罪業の主は、タムバンダーンの儀礼を通じて、ク

クライアントと和解を結ぶ。クライアントは許しを与えられる。また、異常死を遂げた罪業の主に対して、クライアントが葬儀といった方法で、この霊に対応することもない。これらの点で、タムバンダーンの死生観は、これまでの諸研究が取り上げてきた精霊信仰の死生観や、異常死の様相とは趣を異にしている。

こういったタムバンダーンの死生観の特殊性は、いったい何に由来するのであろうか。十分な論証を展開することはできないが、その大きな要因と考えられるのが、加害者としての死の経験である。加害者にとって死の経験は、おそらく葬式で無事解消できるようなものではないのだろう¹⁵⁾。時には、その死の経験は公に公表することさえできないことがある。タムバンダーンの場合は、そこにトランス体験を組み込み、精霊信仰の一般的な死生観には見られなかった、怨霊との情緒的な和解の経験を構築しようとしている。この和解の経験ならびにそれに付随するとされている生活苦からの脱却を持って、「罪業を絶つ *tatkam*」と述べているわけである。

主流の上座仏教、中でも学僧的な見解からすれば、罪業を儀礼によって消去するというタムバンダーンの思想はまったく受け入れられないものである。また精霊信仰ではなく、仏教の一派だと主張するタムバンダーンへは、僧侶たちからのより厳しい批判が待ち構えているだろう。しかし、タムバンダーンは業の生成と消滅に関する解釈において、主流の学僧の見解に対し真っ向から勝負を挑もうとしているわけではない。

タムバンダーンが主流の学僧の見解に挑戦している点にながしかあるとすれば、それは、意図の有無や直接性・間接性を問わず他人の命を奪ってしまうといった、加害者としての死の経験にどう対応するのかという事であろう。五戒に記された「生き物を殺さない」ということが注視されているのではなく（この点は、ワンロップとて同じ立場である）、人を殺めてしまった者はどう生きるべきなのかという点が浮き彫りにされているのである。この点では、いくら学僧が「罪業はそう簡単な事ではなくならない」と述べたとしても、それは問題の出発点であって、終着点でもなければ終着点へ導く道筋でもないのである¹⁶⁾。

しかしながら、タムバンダーンで行なわれるトランス儀礼についても問題はあつた。加害者としての死は、トランス儀礼で許しを与えられるものなのだ

ろうか。ここで問うているのは、その儀礼で罪業を絶つことができ、かつ運勢を向上させられるのかどうかといった教義学的な問いではなく、そもそも加害者としての死は、簡単に許しが与えられたり、たやすく罪責感が取り除かれたりするような、軽い経験なのなのだろうかといった問いである。あるいはもう少し突き放した問いに変えれば、タムバンダーンの儀礼に見られる、許しへ至る安易さは、どこから来るものなのだろうかという事である。それは、クライアントの体験そのものではなく、加害者の死に対して当事者ではないワンロップやタムバンダーン財団側が、水路を付けてまとめ上げた体験談という特質に由来するのであろうか。さらに言えば、ワンロップなどの術者の非当事者としての立場は、彼らが半ば宗教的な脅しの雰囲気を持って、クライアントに加害者の死を意識化させる安易さにも一脈通じているものがあるように思える。加害者としての死の経験には、乗り越えの不可能性ととも、安易な乗り越えに進んでしまうといった問題があり、またそのような死の経験を誰がどういった立場から語るのかといった問題があると言えよう¹⁷⁾。

このような加害者としての死に関する経験は、特殊なものであるが、我々が経験する可能性のありうる死の経験の1つでもある。この死をめぐって加害者と被害者の間には越えがたい溝が存在する。そのような不可能性を背負い込んだ関係に、如何に我々は対応しようとするのだろうか。本稿の事例は、死にまつわるそのような困難な営みを考察する一契機となるだろう。

参考文献

- アヌマーンラーチャトン プラヤー 1979 (1961) 『タイ民衆生活誌 (1) 祭りと信仰』 森幹男訳 勁草書房。
- 小野澤正喜 1991[初刷1982] 「宗教と世界観」 綾部恒雄・永積昭編 『もっと知りたい タイ』 弘文堂：105-142。
- 小野澤正喜 1983 「タイにおけるタム・クワン(スー・クワン) 儀礼——タイ仏教における二重構造の分析——」 吉田禎吾教授還暦記念論文集 『儀礼と象徴——文化人類学的考察——』 九州大学出版会：299-324。
- 川野美砂子 1997 「死者の排除と編入——北タイにおける異常死と再生の観念——」 脇本平也・田丸徳善編 『アジアの宗教と精神文化』 新曜

- 社 269-286。
- 佐々木教悟 1986 『インド・東南アジア仏教研究 II 上座部仏教』 平楽寺書店。
- 奈良康明 1973 「パリッタ (Paritta) 呪の構造と機能」 『宗教研究』 213: 39-69。
- 林行夫 1985 「東北タイ・ドンデーン村：葬儀をめぐるブン (功德) と社会関係」 『東南アジア研究』 23・3: 349-370。
- 林行夫 2000 「ラオ人社会の宗教と文化変容——東北タイの地域・宗教社会誌」 京都大学学術出版会。
- 村上忠良 1994 「南タイ仏教徒の葬送儀礼と死生観 —— ナラティワート県タクバイ郡の事例より ——」 筑波大学歴史人類学系民族学研究室 『族』 23: 1-29。
- 矢野秀武 1994 「変貌する上座仏教 —— 仏教の多様化」 小野澤正喜編 『暮らしがわかる アジア読本 タイ』 河出書房新社 79-85。

◆英語

- Tambiah, Stanley J. 1970 *Buddhism and the Spirit Cults in Northeast Thailand*. Cambridge University Press.
- Tambiah, Stanley J. 1984 *The Buddhist Saints of the Forest and the Cult of Amulets*. Cambridge University Press.

◆タイ語 (年号の後の [] 内の数字は、タイで使用されている仏暦を示している)

- Kromkansasana Krasuwangsu'ksathikan. 1995 [2538] Raigan Kansasana Pracampi 2538 [1995] Rongphim Kansasana. (教育省宗教局 『仏暦 2538 年 (西暦1995年) 宗教業務年次報告』)
- Matichon. 2002 [2545] "Phithi 'Tatkamthamtaeng' Thathai Khuwamchu'a Phutthasasana Yuk Sangkom Sapson-Cariyatahmsu'am". Matichon. Wanangkhan Thi 12 Kumphaphan: 1-2. (マティション紙 『中絶の悪業を絶つ』儀礼 仏教信仰への挑戦 混乱と道徳衰退の時代)
- Mithikam. 1994 [2537] Thambandahan 3 Kammathan Samrap Kharawat Khong Acan Wanlop Thambandan. (ミティカム 『タムバンダーン 3 ワンロップ・タムバンダーン先生による在家向け瞑想』)
- Munlanithi Thambandan. no data (Video) Munlanithi Thambandan Sanoe

- Singmahasacan Thi Rokanphisut. (タムバンダーン財団 [(ビデオ) タムバンダーン財団 摩訶不思議な靈験をここに証明])
- Phatsattha. 1995 [2538] "Acan Wanlop Thambandan". Mahalap. Wan thi 1 Karakadakhom:40-41, 57. (パートサッター 「ワンロップ・タムバンダーン先生」 『大いなる幸運』)
- Thaidam. no date a Thambandahan 1 Kammathan Samrap Kharawat Khong Acan Wanlop Thambandan. (タイダム 『タムバンダーン 1 ワンロップ・タムバンダーン先生による在家向け瞑想』)
- Thaidam. no date b Thambandahan 2 Kammathan Samrap Kharawat Khong Acan Wanlop Thambandan. (タイダム 『タムバンダーン 2 ワンロップ・タムバンダーン先生による在家向け瞑想』)
- (Acan) Wanlop Thambandan. 2001 [2544] Thamthaeng Phan Thuk Cing Ru'. (ワンロップ・タムバンダーン (先生) 『中絶が苦難の原因か?』)

註

- 1) 本稿で用いるタイ語のローマ字表記ならびにカタカナ表記は、西井涼子による様式に基づいている[西井 2001: 8-9]。
- 2) 上座仏教では、比丘尼の伝統が途絶えている。昨今、比丘尼を認める運動も現れているが、いまだ社会的には認知されていない。
- 3) 在家者の涅槃志向は、都市新中間層を中心としていくつかの仏教運動に見られる[矢野 1994]。
- 4) 在家者向けの五戒とは、生き物を殺さない、盗みをしない、淫らな行為をしない、嘘を言わない、酩酊するような酒類を飲まない、という5つの戒めである[ウ・ウェーブッラ 1978: 4]。
- 5) このほかに、王室儀礼を行なう宮廷バラモンや占いその他の儀礼を行なう民間バラモンといった、一般にプラーム (phram) と呼ばれる、非仏教的なインド系宗教伝統のタイ化した信仰なども上座仏教信仰と相互補完的な関係にある[小野澤 1991: 120-125, 1983]。
- 6) ただし、教理学的にも追善供養を認める見解もあるようなので、かならずしも教典に依拠していない見解だとは言い切れない。この点について、今回は十分に論をつめることができなかった。
- 7) 筆者は、1996年9月から同年11月までの約3カ月間、この宗教団体を6回訪れ、儀礼に参加し代表者やクライアント数名にインタビューを行なった。筆者がマスコミ同行で簡単な取材を申し入れた初期の訪問では、団体側は取材

に受け答えしてくれた。しかし後に、筆者が1人で道場を訪れ、その際に、僧侶がこの儀礼を行なわないのはなぜか、占いや仏像建立による供養の実態や費用はどうなっているのか、一部の信徒に対して行なっているとされている瞑想修行の実践場所はどこか、といった、より詳細な活動内容を質問はじめると、団体代表者は極めて非協力的な態度を示すようになった。

その上彼は、筆者が学術論文でこの宗教団体をとりあげるのならば、事前にタイ語で内容を翻訳し、それを団体側に送付し、その後団体側で内容改訂を行なってからでないと公表を許可しないとまで要求してきた。理由は自分たちの活動をまじないや霊媒と見なされる誤解を避け、仏教伝統を引き継いだ活動の1つだと見なしてもらいたいからだというものである。これは、おそらくタイ社会において主流の上座仏教の見解から大きくずれつつも上座仏教を名乗ることが、社会的な制裁の対象になる事を心配してのことであろう。あるいは、彼らの頑なな態度は、上座仏教という看板を用いてクライアントを集め、占いや儀礼を行なう事が、仏教を利用した商業的な行為として批判される可能性に対しての、防御線なのかもしれない。

しかしながら、他方で当団体は、日本のNHKや朝日新聞の取材を受け、内容を確認することなく、記事の執筆と放映を認めている。したがって、筆者に対してのみ事前の内容確認を義務付ける根拠は明確ではない。とはいえ、上記のような条件で、一部のインタビューを許可していただいた経緯もあり、本稿では、筆者が行なったインタビューならびに観察記録は一切使用せず、一般人でも入手が可能な外部向けに出版された書籍や雑誌記事ならびにビデオや新聞・テレビでの放映内容のみを資料として使用する。

- 8) タムバンダーンの書籍では、ワンロッパが師事した僧侶が止住していた寺院の所在地は明確に記されている。しかし筆者はここを訪れたことがなく、この僧侶の活動について確かな情報を持ち合わせていない。
- 9) この数字は、三蔵教典の経文の数と同じだとされている。
- 10) 全国各地の術者からの学習、諸精霊の統合といった点で、タムバンダーンは村落社会の精霊信仰とは異なり、地縁性を越えているといった特色を有している。また、実際に、クライアント同士知り合いであることも少ないし、集合的なトランス儀礼でさえ、個人々が思い思いに行なっている。こういった点で、都市化や個人主義化を指摘できるかもしれないが、個人という概念は、とりわけ憑依現象を取り上げるときには、かなり周到な準備の上で、使用しなくてはならないだろう。
- 11) タイにおける中絶の実態、優生思想と国家の対応、中絶を行なった女性

やそれに関与した男性の身体的精神的苦しみ、クライアントの社会階層や家庭内の位置づけ、タイ人の家族観念、中絶を子殺しと明確に位置づける思想の有無など、これら重要な点について、筆者はまったく知識を有していない。この点はこの論考における問題点であると自覚している。

- 12) この尋問に誘導されるが如く中絶経験を話す女性の体験談が多く掲載されているという点からは、タイで中絶が多く行なわれているという事を推察することはできよう。また、タムバンダーンは例外的な事例であり、タイでの水子供養は日本ほどあからさまに行なわれているわけではない。ただし、通常のタンブン儀礼の際に、密かに水子供養を兼ねて布施などを行なっているケースはある。
- 13) 本稿では、何をもって（上座）仏教と言えるのか、誰がその判断をする立場にいるのかといった込み入った議論を行なう準備がないので、この問題には介入しない。
- 14) 一般の辞書的な意味においても、「ナ」という言葉には、霊験をもたらす作用や呪文という意味がある。
- 15) そして当然、被害者（の関係者）にとっても同様に簡単に処理できる経験ではないだろう。
- 16) この点について、主流の上座仏教における僧侶や女性出家者たちががどう対応しているのだろうか。この課題については、本稿では扱う準備ができていない。しかし、刑務所にいる受刑者たちに教えを説く教誨師としての僧侶や在家者教師はいる。彼らの活動から加害者の死への対処の一端をうかがうことはできると思われる。
- 17) このようなデリケートな死の経験に、いかなる立場から、またどのような言葉使いを用いて、接近していけばよいのだろうか。この点について、筆者は十分な準備ができていない。筆者の論考が、読者の人生の中で深い意味を持った経験に対して、配慮の欠けた言葉を投げつけているとしたならば、この場をかりてお詫びしたい。

（やの・ひでたけ 研究拠点形成特任研究員）

From “Sobbing with Grudge” to “The Dance of Blessing”: The Experience of Death as a Homicide and Ritual Elimination of Sin in Spirit Cult in Thailand

Hidetake Yano

This paper focuses on a religious group in Thailand. The group practices a special ritual in which clientele perform spirit possession. The group insists that this ritual, with some other offerings, can calm down vengeful spirits and eliminate the suffering of the clientele. Further, the group explains that such vengeful spirits arise from sinful acts committed by the clientele, such as homicide, including abortion, with intention or without intention.

By focusing on this peculiar ritual and its explanation, we are trying to understand part of the image of death in Thailand. The image of death in this ritual and its explanation seems to be different from the usual idea of death in Theravada Buddhism and in spirit worship in Thailand. This is because this ritual and its explanation concern unusual death, especially the experience of death as a homicide.

The status of this unusual experience is unstable and also difficult to deal with. Sometimes it may be against the ethics of Theravada Buddhism. Focusing on this experience may lead to a deeper understanding of the ethics of Theravada Buddhism in Thailand.